

リアル・コート

会員 古川 理彩子



法廷への入り方？

東京地方裁判所での期日を終えて法廷を出ると、中年の女性に声を掛けられた。

「中に入るにはどうしたらいいのですか」

「ドアを開ければいいだけですけど」

心の声がとっさにそう答えた後、自分が初めて裁判傍聴に行こうとした時のことを思い出した。今でこそ当たり前のように法廷に入っているが、当時は「ノックせずに入っているものだろうか」と悩んだりののだ。

ピンチヒッター

そのご婦人は、傍聴に来たわけではなかった。消費者金融から訴えられた夫の代わりにわざわざ茨城県から出頭したというのだ。ご主人は病気で自宅療養中とのことである。簡単に事情を聞くと、返済のあてはなく、差し押さえられるような財産もないとのこと。ご婦人はすでに半泣きの状態。とりあえず書記官に事情を説明しましょうということで一緒に中に入り、「ほら、今です」と言ってご自分で書記官に話しかけてもらった（ギリギリご主人の事件に間に合った）。裁判官がご婦人から事情を聞き、原告代理人の意向を確認した上で結審の運びとなった。

遠い裁判所

法廷を出ると、判決の時もまた来なければならな

いのかという質問を受けたので、もう来なくてよいと説明をした。そもそもこの日も、わざわざ茨城から東京まで来ずとも、事前に担当部に電話連絡することで足りたはずである。実際に足を運ぶことで裁判官や原告代理人に直接事情を伝えられたことは無駄なことではなかったであろう。しかし、ずっと半泣きのご婦人を見ていると、数千円もの交通費と時間をかけて不安を抱えながら来なくて済むならば、それに越したことはなかったと思う。

まずは担当部に連絡してみるという発想も、弁護士になった今でこそ当たり前に思いつくが、裁判とは縁遠いご婦人が「裁判所に呼ばれたら行かなければ」と思ってしまったことも無理からぬことである。一般の人にとって裁判所とは遠い存在なのである。

『リアル・コート』

ドラマや映画では弁護士や裁判がよく出てくるのに、一般の人は裁判所のことを殆ど知らない。一概にはいえないが、手続的側面をないがしろにした作品が多いように感じる。映像メディアの影響力は絶大ゆえ、実際の裁判所がどのように動いているのかをちゃんと描いてほしい。裁判所書記官が主人公のドラマなんてどうだろう。あまり気軽に書記官室に来られるようになって困るかもしれないが、裁判所が身近になることは、個人の権利救済にもつながる、良いことだと思うのである。